

『ひょうご歴史研究室紀要』第五号の刊行にあたって

『歴史研究室紀要』第五号の発刊にあたって感慨深いものがあります。その理由として第一に、創刊号から五号まで継続して発刊できたという実績。第二に論文、歴史遺産活用、フィールド・レポート、そしてひょうご歴史研究室活動記録という誌面構成が確立し、研究室内外の執筆者に寄稿してもらったこと。さらに第三に、『播磨風土記』、赤松氏と山城、たたら製鉄の三つの研究班の研究成果が、ほぼ均等に発信できていること。以上の三点を挙げることができます。その結果、学術雑誌として、どこに出しても恥ずかしくない雑誌になつていいると考えます。

くわえて日本語表紙と並んで、裏面に英語表記があることを挙げたいと思いますが、これは著名な学会誌にならつたものです。日本語が分かる外国人研究者でも、英語表記があると内容が推測しやすく、かつ検索でも引っかかりやすい、という声を耳にしたことがあります。日本史研究の発信という点でも、英語表記があるとないとでは大きな違い。ところが専門の日本語表題を英語に直すにはそれなりの知識と経験があるので、大学の紀要類には英語表記がないものや、かなり疑わしい表記も時折、見られます。『歴史学研究』『日本史研究』『考古学雑誌』『考古学ジャーナル』など数千人の会員・読者を擁する学会誌ならともかく、わずか八〇〇部の刊行部数しかない本誌に、それが掲載されているのは驚きでもあります。創刊号以来、翻訳に協力して頂いている友人スイス・チューリッヒ大学教授（東洋美術史）ハンス・トムセン氏の名を挙げて謝意を表したいと思ひます。

さて本号から、論文の掲載を班ごとに分けるという四号までの形式を変更しました。『播磨風土記』班といいなながら淡路や出雲を取り上げていること、赤松氏といいなながら刀剣を通じて「たたら製鉄」に関係しているなど、班を超えて研究の交流が進むようになってきたことを考慮した結果です。研究組織としての所屬が情報として必要な場合は、末尾に収める「ひょうご歴史研究室構成メンバー一覧」をご覧頂きたいと思ひます。

班ごとに論考を載せるという形式を一変した関係で、誌面は概ね時代・年代順に編成されていますが、お二人が本誌に初登場されています。赤松氏と山城研究班の永恵裕和氏は、赤松居館跡を中心に周辺環境を詳細に検討され、三次元の模式図を寄せられました（口絵参照）。たたら研究班の岩城卓二氏は、たたら研究の先進地Ⅱ石見との比較史的な観点から論考を寄せられましたが、その背景にあるのは近年、進展を見ている島根県との文化財調査・研究を通じた交流の積み重ねです。「歴史遺産活用」に収めた丹羽野裕氏と山下史朗氏の論考には、その状況が記されています。

本号にはいま一つ、新傾向が示されています。フィールド・レポートとして、これまでの風土記写本調査報告に代わり、たたら製鉄遺跡の発掘調査報告が登場しています。宍粟市安積山遺跡という重要な遺跡の報告として初公開です。また歴史研究室「成果の窓」が新設されました。成果はこれまで、講演会やシンポジウム、紀要の論考として発信されていますが、データとして集積されたモノを公開する誌面がありませんでした。五山文学詩文集の中から播磨関連の地名・寺社名・人名を拾う作業が一区切りし、整理されたのを受けて公表します。力作をお寄せいただいた執筆者諸氏に、お礼を申し上げます。なお、本誌刊行に相前後して『ひょうご歴史研究室紀要』別冊として『近世播磨のたたら製鉄史料集』A4版約二〇〇頁が発刊されます。『紀要』と同様、一般に販売できないという苦しい悩みがあるのですが、できるだけ必要とする読者に届ける工夫をしたいと思えます。ご期待ください。

令和二年（二〇二〇）三月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長

藪田 貫